

山頭火意外伝

井上智重著 (熊本日日新聞社・2000円+税)



鉄鉢の中へも霰 山頭火
山頭火の人生は深い抑鬱を抱えての行乞漂泊である。足の滞る日も多い。とある農家の軒先で読経を始めようとした瞬間、米粒のような霰が鉄鉢の中で真っ白く撥ねた。霰のかすかな響きにふっと心が動かされ、山頭火は歩を進めようと促されたのである。たった七文字、五七五という定型に捉われず時空の瞬間を切って写し取った鮮やかな一句であろう。

咳をしても一人 放哉

山頭火と並ぶ自由律の句人が放哉だが、この句には季語さえない。修辭のすべてを排し七文字だけで、一人死んで

ゆく最期のどつしようもない悲しみを妖しくも伝えている。自由律句は、河東碧梧桐、荻原井泉水などにより明治から大正にかけての自然主義文学運動の中で生まれた形式である。定型という規範性、季語という情緒性から解放され初めて自然と人生への自由な接近が可能になるという思想であった。『層雲』が

自由律句の有力誌である。しかし、振り返ってみると山頭火と放哉の2人以外に自由律句で才能を開花させた句人は、評者のみるところほとんどいない。なぜなのかはわからないが、やはり定型を破って短律の句を「放り投げ」て読者を惹き付けるには、よほど特異な才能が必要だということなのであろう。

本書の著者は熊本日日新聞社で働きながら熊本の近代文学の研究に携わってきたジャーナリストである。山頭火の生涯を、多くの山頭火論では

評・渡辺利夫

(拓殖大学学事顧問)

触れられることがなかった資料を駆使しながら執筆した実に真摯なる評伝である。山頭火は衝かれるように歩き、ただ歩いた句人であり、途中で会う人に酒を奢らせ借金をし、また酒、酒、酒の破滅型の人生であった。しかし、どこへいってもこの男を見捨てる者はいない。自由律の句人としてすでに名をなしていたがゆえの配慮もあろうが、人々を惹き付ける愛嬌もあつたのに違いない。行乞漂泊をつづける人間を寛容に受容する共同体がまだ全国のそこそこにあつた戦前期の日本に生きた句人の物語でもある。

漂泊句人を受け入れた人々